虚の筏 ソラ イカダ 2

洪水企画 2012.7.12

海を超えて ―シングに

神泉　薫

ああ、西風が強いわ。大しけがやってくるのね。
あおい帆布をはるばると広げた、水の魔王の呼吸、
白木の板を用意しておいて、
聖水と　それから焼きたてのパンも。
おしまい、の意味がわからなくなるぐらい何度も
繰り返してきた準備よ。
海に行くのは、若い男の人生、
そう、島の暮らしには必要なこと。
メリヤス編みの網目を数える女の人生の向こうで
男たちはみんな海に入った。
そして体を失くして帰ってきたわ。
あとからあとから
シャツの切れ端と靴下が水底からあふれて、
誰が誰のものかわからなくなる。
きっとみな愛しい息子たち、夫たち、
勇敢な船乗りたちの　体温の記憶を宿した命のぬけがら
そして今
永劫不変の厳しさを見せる
ごうごうと鳴る荒波が
いちどきりの子守唄に変わる日を夢見て
冬祭りの後の長い夜をゆっくりやすみましょう。
あの日と同じように
ドアが静かに開いて
あれは　マイケル？
それとも　シェーマス？
いいえ、パッチよ、いいえ、スティーヴン、それとも　ショーン、
いいえ、いいえ、みなすでに見送った男たち。
くるまれた布から滴る水が　乾いた床に沈黙の声を落とす、
あれは最後の息子、
運命づけられた灰色の子馬に蹴落とされて
断崖から海へ落ちた、
バートリー！
私の息子！
どこまでも呪わしいこの世界を肯う
おまえの優しい声
もう見ることのない幻の笑顔が
幾千もの命を胎内に畳み込んだ母たちの胸に
霧深い生の雲間から射す太陽と化して
赤く大きく燃え上がるようだよ、

――元気でね、おかあさん。
ぼくは　いつもいる
あの海の向こうに。
みんな一緒に
いるよ、
おかあさん。

※J・M・シング原作　高橋順子著『この海に』（デコ）より、一部引用。

間接光

小熊昭広

内含
する声
ぎしぎしと
神経を尖らせる
私は笑っているのだ
決して怒っているのではない
決して先祖返りをしようとしている
のではない　優しく装置を労って
いるのだ　過去を思い出す
ために　錆びた心を
ぎしぎしと　ね
じらなけれ
ばならな
いのだ
滴り
落ち
る
記
憶
と
記憶
あ
る
種
の
儀
礼
と
言
え
よ
い
だ
ろ
う
か
予
告
で
き
な
い
の
だ

英雄譚

二条千河

英雄の名を口にするとき
少年は瞳を輝かせ
乙女は頬を桃色に染め
古老は薄い胸を反らせる
彼がどんな言葉を語り　何を為したかは
幾通りにも伝えられているけれど
これだけは皆　声を揃える
彼は今遠い国を旅していて
いつかこの町に帰ってくるのだと

英雄の生家の跡地では
やがて帰還する彼に贈るために
邸宅の建設が進められている
高い天井を支える大理石の柱
小鳥がさえずり花々の咲き競う庭園で
町中からの寄附が引きも切らないので
設計図は次々と描き足され
工事は一向に終わらない

町外れの小川のほとりに人知れず傾いた
みすぼらしい墓標に記されているのが
英雄と同じ名であるとか
彼の生年がもしも記録の通りだとすれば
優に数世紀を過ぎている計算になるとか
余所者がどんな証拠を並べ立てようとも

英雄が今も英雄のまま生きているという
ただ一つの物語を守り抜くために

天を衝く巨大な宮殿が
小川のほとりにそびえ立ち
さして英雄的でもない死を迎えた凡夫の墓は
際限なく拡張する庭園の一角に埋没する
季節が廻るたびに新たな花を植え替えながら
これだけは皆　声を揃える
英雄は今遠い国を旅していて
まもなくこの町に帰ってくるのだと
彼がどんな家に生まれ　何という名なのかは
幾通りにも伝えられているけれど

étude 音楽（1）

池田　康

楽器

楽器　音の器（うつわ）　その曲線は夢の果実
どんな歌の思考が　どんな季節の風が　どんな物語が
この魅惑の形を導き出したのか　二つの手を迎える
祭の秘儀　その恍惚の　舞踏の精の跳梁
やがて手をはなれ　そっと静寂の胎にもどされ
従順のもだし　それは宇宙と対話するように
幾万年の時間を引き寄せ　すべての音楽を蔵し
待っている　光の中に舞台が現れる夜を

フルート

細い管を息が通る
銀の道を鳥が通る
ナイフは時間を切るのか
メスは記憶を切るのか
切られた時間の虚空を鳥が飛ぶ
切られた記憶の虚空に鳥が鳴く
鳥はどこへ行くのか
銀の道の葛折（つづらおり）きえる　天の樹へ

チェロ

ワインを始終腹に入れているおじさんは
陽気で調子っぱずれで憎めない
楽譜を斜め読みしてきとうにうなると
森が生まれ川が流れ空が広がる
鳥が飛び獣が走り虫が舞う
ワインおじさんは神であるか
いいやただの飲んだくれだよ
とすっとぼけて笑っている

今回の執筆者
神泉薫＝神奈川県相模原市
小熊昭広＝宮城県柴田郡
二条千河＝北海道白老郡
池田康＝愛知県名古屋市